

[野菜部門 令和8年度 参考となる研究成果]

事項名	にんにくのさび病に対するインピルフルキサム水和剤（カナメフロアブル）を用いた効率的防除法		
ねらい	にんにくのさび病の薬剤防除では、春季からの発生を対象に、初発時期に散布を開始するとともに、各薬剤の散布時期別の効果持続期間（散布間隔）を考慮することで、効率的な防除が可能である。そこで、新規登録薬剤でSDHI剤のインピルフルキサム水和剤（カナメフロアブル）について、散布時期別の効果持続期間を明らかにするとともに、既存のQoI剤、DMI剤との組み合わせによる効率的な防除を実証したので、参考に供する。		
内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 カナメフロアブルの散布時期別の効果持続期間（散布間隔）（図1） 初発時期の散布では4週間程度を、蔓延期の散布では3週間程度を効果持続期間（散布間隔）とする。 2 3つの薬剤システムを組み合わせた効率的防除法（図2） <ol style="list-style-type: none"> (1) 使用薬剤 登録のある各薬剤システムの中で、防除効果が高く、特に蔓延期の効果持続期間が長いカナメフロアブル（SDHI剤）、アミスター20フロアブル（QoI剤）及びオンリーワンフロアブル（DMI剤）を使用する。 (2) 散布順序と防除効果 散布順序にかかわらず、各薬剤の散布時期別の効果持続期間を目安にローテーション散布を行うことで、防除効果の高い効率的な防除が可能である。 		
期待される効果	防除効果の高い薬剤の適時・適切な散布によって散布回数・経費・作業時間等の削減が図られるとともに、ローテーション散布を行う際の薬剤システムの選択肢が増えることで薬剤耐性菌の出現抑制・回避が更に図られ、安定生産に寄与する。		
利用上の注意事項	<ol style="list-style-type: none"> 1 本資料は令和8年1月28日現在の農薬登録内容に基づいて作成した。 2 農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認して使用者の責任の下に使用すること。 「農薬情報」（https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/） 「農薬登録情報提供システム」（https://pesticide.maff.go.jp/） 3 「初発時期の散布」とは、消雪後の散布開始時期を考慮した1回目の散布を対象とする（「令和4年度指導参考資料」を参照）。「蔓延期の散布」とは、発生が目立ってきた頃以降の散布で、通常は2回目以降の散布を対象とする。 4 アミスター20フロアブル及びオンリーワンフロアブルの散布時期別の効果持続期間は、いずれも初発時期は4週間程度、蔓延期は3週間程度である（順に「平成12年度指導参考資料」、「平成21年度農薬関係資料」を参照）。 5 本資料は、にんにくの葉の両面が十分に濡れるくらいの散布液量（生育に合わせて250～300L/10a）での地上散布による試験結果に基づいている。 6 多発生が予想される場合には散布間隔を短くし、発生が少なければさらに長くするなど、発生状況に応じて散布間隔を調整し、散布回数を加減する。 		
問合せ先（電話番号）	農林総合研究所 病害虫管理部 (0172-52-4314)	対象地域 及び経営体	県内全域のにんにく作付経営体
発表文献等	令和3、7年度 農林総合研究所試験成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】

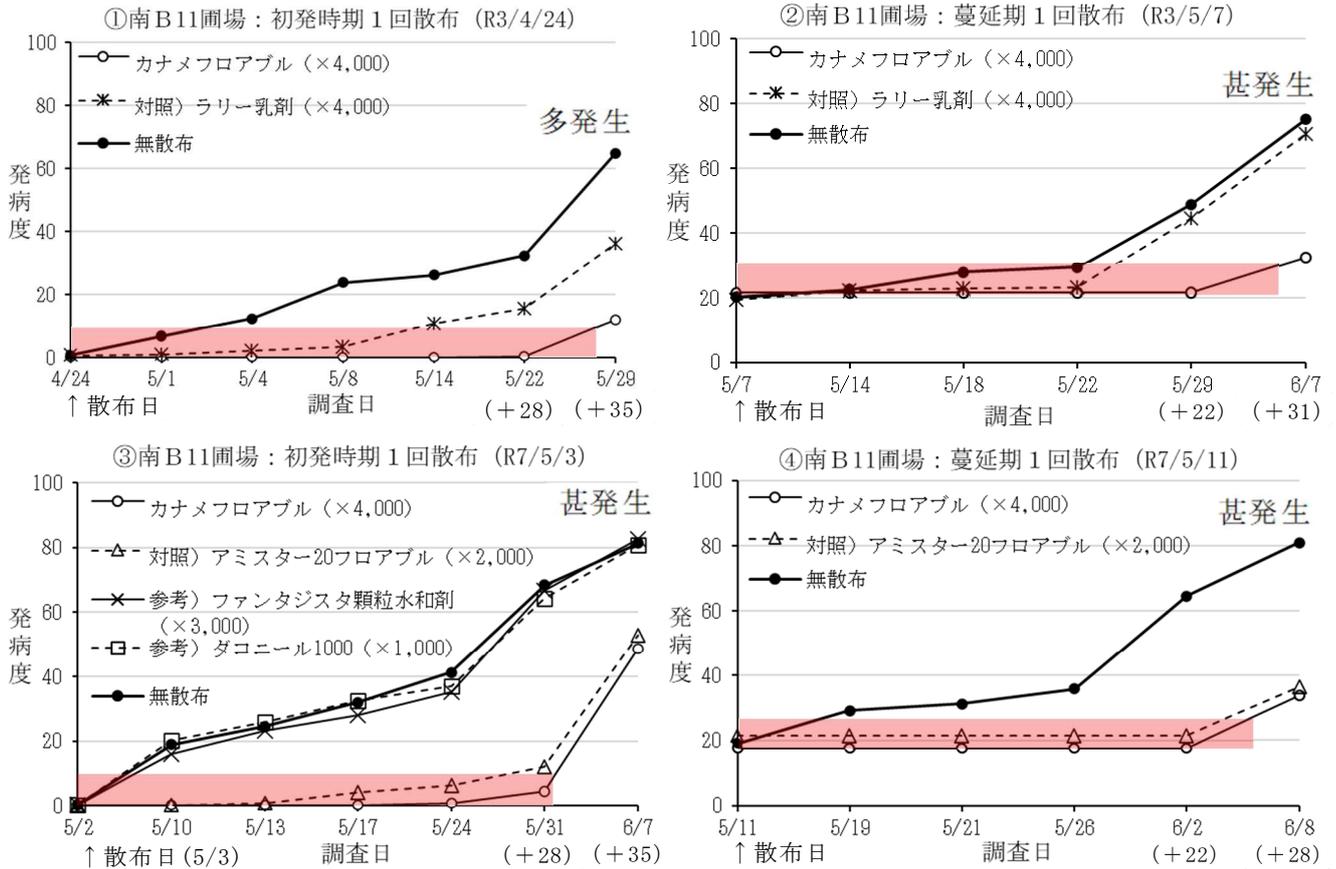


図1 にんにくのさび病に対するカナメフロアブルの散布時期別の1回散布による防除効果 (令和3、7年 青森農総研)

- (注) 1 初発時期散布：越冬菌由来の病斑が出揃う潜伏期間の終了日 (令和3年は4月10日頃、7年は4月20日頃)を確認後、発生状況と株の大きさを考慮し、ここでは夏胞子感染によって新葉部分で発病し始めた頃となる散布開始晩限に実施。
 2 蔓延期散布：株当たりの発病の程度は軽微であるが、発病株率の急増 (データ省略) による発病度の上昇を確認後に実施。
 3 展着剤：ネオエステリン (×5,000、R3) 又はミックスパワー (×3,000、R7、図2共通)。
 4 効果持続期間：散布後から発病度が10程度増加するまでの期間 (図中の塗りつぶし) で、複数試験で期間が短い方とする。

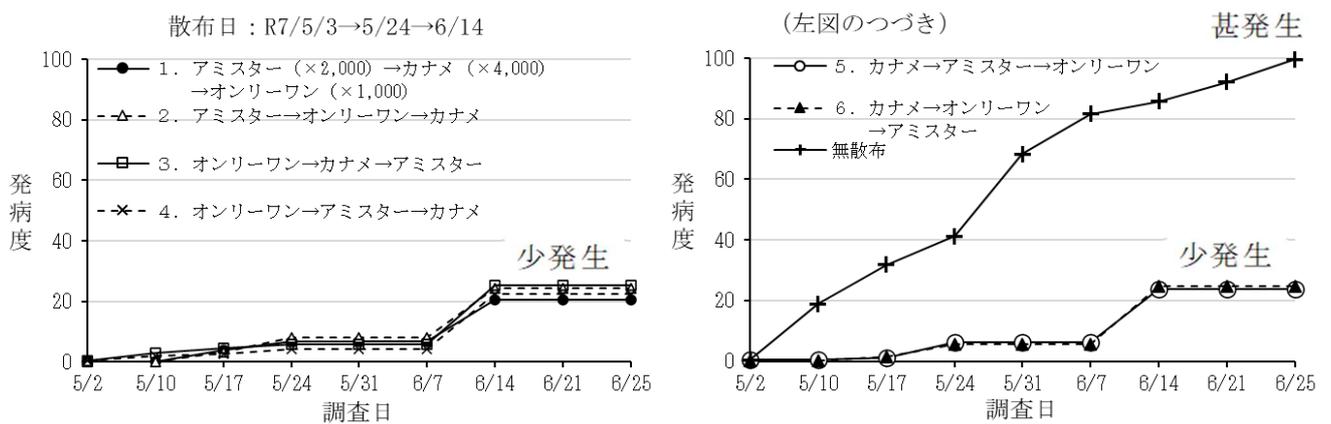


図2 にんにくのさび病に対する薬剤系統の異なる3剤を組み合わせた体系防除の一例 (令和7年 青森農総研)

- (注) 1 カナメフロアブル：SDHI 剤、アミスター20フロアブル：QoI 剤、オンリーワンフロアブル：DMI 剤。
 2 薬剤散布のタイミング：1回目は図1と同じ。2回目は無散布区での発病度がこの時期としては高かったことから予定よりも1週間早めて3週間後に実施。3回目は2回目散布の3週間後に実施。6月30日収穫のため今年の散布は3回で終了。
 3 各散布区での6月7～14日にかけての発病度の急増は、2回目散布後に展開してきた上位葉での感染・発病が影響。一般圃場と異なり圃場全面散布ではないため、隣接する無散布区の発生源としての影響が大きいことに注意。